

## 教育長賞の選評

協和小学校 六年 瀬戸口 理帆 「川うつる 万華鏡は 秋の山」  
色とりどりの秋の山の木々が、川に映り映えているのを見ると、まるで万華鏡を覗いているようだという美しい情景です。川を万華鏡と見た観察眼が、優れた俳句にしました。

垂水中央中学校 二年 西原 千尋 「鮮やかに 緑と水が 踊る夏」  
生命のあふれる夏という季節を、「緑と水とが踊る」と擬人化して表現したところが、うまくいきました。緑と水を生命力の象徴とした着眼もいいですね。

垂水高等学校 二年 篠原 真奈 「せせらぎの 水面を弾む 蝉の歌」  
蝉の声が、小川の水面を弾みながら聞こえてくるという印象的な俳句です。俳句は、短詩形なので一語で印象が変わりますが、「弾む」という表現が素晴らしいですね。

## 講評及び今後に向けての指導

【小学校】 小学生らしい着眼の面白い俳句に優れたものがありました。田中さんの「おいわいパレード」、谷浦さんの「歌声」、新屋さんの「着物をぬぐ」などがそれで、観察した現象を擬人化（人間の行為に見立てたもの）したところが、俳句を印象的なものになりました。神田さんの句は、水滴の僅かな光を見落とさなかった観察の鋭さが、俳句を引き立てています。俳句は、観察と表現ですから、いつも身の回りの出来事に注意してください。

【中学校】 有馬さんの句は、実際に川に潜って聞こえた実景とも、川底まで聞こえるようだという比喻表現とも理解できます。それはどちらでも構わず、全山蝉時雨という真夏の渓谷が印象的に表現されています。永田さんの句は、おそらく夕方に微かに揺れる稲の穂の中を帰路につく様子が描かれています。現在では若者に限らず、稲の穂に郷愁を感じることは少なくありませんが、日本人には懐かしい景色です。二句とも垂水という田園都市ならではの句です。このように俳句の素材は、身の回りにいくらでもありますから、感覚を研ぎ澄ましてください。表現は、観察です。

【高等学校】 吉田さんの句は、「陽花」を「ひばな」と読ませていますが、紫陽花という漢語からはアジサイを、ひばなという読みからはヒマワリを想像させます。句全体からはヒマワリでしょう。日本語の表現では、ダブルイメージといいますが、「紫陽花」に「ひばな」とルビを振ったり、「向日葵」に「ひばな」とルビを振ったりして、漢語のもつイメージとルビのもつイメージとの二重性をねらった表現をします。とくに、俳句や短歌の短詩形ではよく用いられます。こういう表現の面白さを試みてください。